

水戸光圀における「源義経」論

— 鴨越の坂落しと弓流しの逸話から —

但野正弘

「キーワード」

源義経（九郎判官）、水戸光圀（徳川光圀）、一谷の合戦・鴨越の坂落し、屋島の合戦・弓流し、謡曲「摂待」、義経の入夷伝説、快風丸蝦夷地派遣、成吉思汗説

はじめに

昨年、平成十七年度のNHK大河ドラマでは「義経」が放映され、筆者も一年間にわたって毎回興味深く視聴してきた。

そうした中で、筆者の日頃の研究テーマでもある水戸学・水戸史学の面からの関わりで、『大日本史』という歴史編纂の大事業を推し進め継続させた水戸黄門こと、水戸二代藩主徳川光圀みつくに即ち水戸光圀が、源義経という人物をどのように見ていたか。源平合戦の中で義経がとつた戦略や行動をどのように分析し、武将義経に対して如何なる評価を与えているか等について、筆者も強い興味関心を持つに至り、手の及ぶ範囲の諸記録・史料を繙いて検討してみた。

その概略を、本「紀要」誌を通じて紹介してみたいと思う。

言うまでもなく、光圀も徳川氏の一族出身者として、「新田源氏」

の系列に連なる立場を重視し、誇りとしている。

彼が自らの生涯を書き記した『梅里先生碑文』の最後にも、

「碑を建て銘を勒する者は誰ぞ、源の光圀 字は子龍」

と、徳川氏の本姓である「源氏」で記している。

一、義経の戦略・行動に対する、光圀の批評

さて、大日本史の編修に際しては、光圀は折りに触れて、史臣達に編修方針や記述の仕方について、指示を与えているが、それを記録した「御意覚書」という書物に、次のような記事が収載されている。

I「御意覚書」の記事

己卯（筆者註、元禄十二年・一六九九）

〔A〕「義経弓流之事ヲ、平家盛衰記ニ義経手柄之様ニ書タルハ甚

誤ナリ。大将ハ大功ヲ建ルヲ以干要トス。小節ニ不レ可レ拘。此

議論列伝分註ニ書著シ、尤も盛衰記参考ニも書載可レ申候事」

〔B〕「鴨越坂落ノ事、文華ノ虚飾也。此議論書 著可レ申候事」

「右五件（註、他の三項目は略） 卯三月中被ニ仰出ニ候」

と、四国の屋島の戦いに際して、義経が弓を海水面に取り落としてしまった「弓流し」のことと、華々しい義経の「鴨越の坂落し」のことについて、光圀の考えが示され、それに関連しての記述の指示が与えられている。

更に、天明年間（一七八〇年代）に水戸の学者立原翠軒が編集した

『西山遺聞』巻下を見ると、「安宅船御物語の事（貞享元年甲子九月朔

日物語」に続いて、「鴨越御物語の事」が採り上げられている。

II「西山遺聞」巻下の記事

㊦ 「鴨越御物語の事」

「又同日御物語。鴨越を馬にて落したるといふ事ハいつハリなるへし。城の後よりまハリ敵の不意に乗する事ハ上々の謀なり。しかれとも城の中へ入りてハ歩行にてハたらくべき也。

馬上にて働くべき様なし。されバ山を下るにはなるほど身をかるくして、つたかづらになりともとりつき、或は懸絶の所ならハ繩などをさげてすがりてもくたるへきなり。

絶壁を馬上にておろす事何とてなるへきぞや。馬をのりハなしていつれも歩行にて下る事上策也。草子の説不可信用」

「割註、
佐々宗淳筆記」

と、「御意覚書」の記事よりも、より具体的に問題を指摘している。

次いで、㊦「弓流し御物語の事」については、僅かな仮名遣いの違いはあるが、「御意覚書」とほぼ同文とみて良い。ただ、末尾を見ると、「元禄十二年己卯御物語の由安積覚兵衛筆記に見ゆ」の一文が割註として付記されている。

右の二書の記事を比較してみると、「御意覚書」では、㊦㊧の記事共に、「己卯」即ち元禄十二年（一六九九）に仰せ出された指示のようを受け取れるが、「西山遺聞」では、㊦については、貞享元年（一六八四）九月に光圀が物語ったものであると、「佐々宗淳筆記」を引用して記載している。

佐々介三郎宗淳は、元禄十一年（一六九八）六月に五十九歳で死去しているので、介三郎が実際に光圀から話を聞いて記録していたとすれば、貞享元年物語の方が、年次的には正しいと言える。

従って、㊦の「鴨越御物語の事」は、貞享元年（一六八四）に、一方、㊦の「弓流し御物語の事」は、元禄十二年（一六九九）に、それぞれ光圀の物語りがあり、更に指示がなされたものと推定してよいであろう。

次に、光圀が問題とした義経の「鴨越坂落し」のことで、「弓流し」の件について、諸書に記されている記事に目を向けて、その概略を紹介することにしよう。

【諸本に見る、「鴨越坂落し」関連記事】

I『平家物語』巻九「坂落」

同書においては、かなり詳細に鴨越から一谷（一ノ谷）に至る合戦の様子を描いているが、ここでは省略し、次の『源平盛衰記』の記事に譲ることにしよう。

II『源平盛衰記』巻第三十六「鷲尾一谷案内者の事」

同書の記事も詳細にわたっているが、要点のみを紹介したい。

◆ 須磨浦・一谷に布陣した平家を攻めるにあたって、大手は生田の森（JR神戸駅付近）方面から海岸沿いを進軍する兄源範頼。搦め手は、内陸の三草山・鴨越方面から攻める弟義経軍との二手に分かれた。

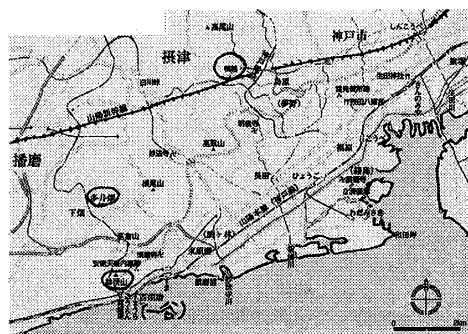
◆ 義経は山の獵師の子を採用して、鷲尾三郎経春（一説に義久）と名乗らせて案内者とし、一谷の鴨越に向かったという。

◆ 現在の地図で見ると、「鴨越」は、

神戸市兵庫区鴨越町（神戸電鉄有馬線・鴨越駅）にある。その場所は、一谷のすぐ背後に位置するのではなく、かなり離れている。

◆ 実際の戦いは、旧山田村藍那から南へ下り、多井畑を経て一谷へかけての古道の付近であったとも言われている。しかし諸説があり、実態は不明と言わざるを得ない。

（下図を参照）



「一谷の合戦」付近の略図

◆ その鴨越付近に到達した義経は、鷲尾に地形状況を尋ねた。

鷲尾 「此の山をば鴨越とて極めたる悪所、左右なく馬・人通るべしとも覚えぬ。上七八段は屏風を立てたる様にて、白砂交りの小石なれば草木生ひず馬の足留まり難し。それより下五六段は岩磯にて人だにも通り難し」

義経 「此の山には鹿は無きか。かの悪所をば鹿は通らずや」

鷲尾 「鹿こそ多く候へ。…」

義経 「殿原、さては心安し。やをれ鷲尾、鹿も足四つ、馬にも足四つ、尾髪の有ると無きと、爪の破れたると円きとばか

りなり。西国の馬は知らず、東国の馬は、鹿の通る所は馬場ぞ」

というところで、次の話に移って行く。

III 『源平盛衰記』卷第三十七「義経鴨越を落す 畠山馬を荷ふ 附馬の因縁の事」を見ると、

「二月 七日の暁、九郎義経は鷲尾を先陣として、一谷の後鴨越へ向ふ…辰の半ばに鴨越一谷の上、鉢伏（註、一谷の西）磯の途（岩石の道）と云ふ所に打登る」

義経 「馬に乗るには、一に心、二に手綱、三に鞭、四に笠と云ひて四の義あれども、所詮心を持ちて乗るものぞ、若き殿原は見も習へ、乗りも習へ。義経が馬の立てやうを本にせよ。」とて、真逆に引向け、「つゞけつゞけ」と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて流れ落ちに下したり」

しかし、義経らは途中の壇の所で落ち留まってしまい、更に下に下ることについては、余りにも危険なため躊躇していたところが、三浦党の佐原十郎義連が進み出て、「先陣仕らん」と只一騎で駆け落として行った。そこで義経が「義連討たすな。つづけ者共、つづけ者共」と下知して、我身もつゞきて落されけり…。

IV 鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鏡』（巻第三・寿永三年）にも記事の記載がある。

二月七日丙寅、雪降る。寅剋、源九郎主、先づ殊なる勇士七十余騎を引分けて、一谷の後山「割註、鴨越と号すと」に著く。…九

郎主、三浦十郎義連已下の勇士を相具し、鶴越「割註、此山は猪鹿兎狐の外通らざる險阻なり」より攻め戦はるるの間、商量を失ひて敗走し、…」（原文、和様漢文体）

と簡略ではあるが、現地からの報告に基づいて、要領よく状況を記録していると思われる。

では、肝腎の『大日本史』では、どのような記述がなされているのであろうか。

V『大日本史』(卷之一八七 列伝第一一四 將軍家族一 源義経)

「七日、義経：將に鶴越を下らんとし、先づ鞍馬教匹を下して之を試みしに、或は傷き、或は恙無し。義経之を視て曰く、『馬を下して自ら下らしむるも猶ほ是の如し。騎者意を加へば、何ぞ墮傷を慮らん。凡そ馬を險惡に馳するに四術有り。而してその要は専ら心に在り。汝等我が騎を以て準と為せ』と。衆に先ちて進む。

衆皆魚貫して下るに、一人の傷損無し。」（原漢文）

と、概ね『平家物語』『源平盛衰記』『吾妻鏡』等を参考にして、記述されていて、光圈による「鶴越坂落ノ事、文華ノ虚飾也。此議論書 著可申候事」という指摘・指示については、現行の『大日本史』の本文中及び割註には、その議論の記載はない。

【諸本に見る、「弓流し」関連記事】

I『平家物語』卷十一「那須与一」

◆ 元暦二年（文治元年・一一八五）2/16 梶原景時が「逆櫓」

（船の舳先に櫓を備えつけること）の付設を主張したのに対し、義経が敢然と反対して激論となり、あわや切り合いに及びそうになった事件があつたが、その夜半、折からの大嵐をおして義経は五艘の船（兵一五〇名）で阿波の勝浦河口付近（徳島市）に乗り付けた（2/17）。

そして2/18に、勝浦から大坂越を行なつて屋島に到着し、そこで、有名な「屋島の合戦」の火蓋が切られた。

◆ その戦いで、那須与一（余一）が「扇の的」を見事に的中させたこと。佐藤嗣信（継信、つぎのぶ・つぐのぶ）が、義経の楯となつて矢に射られて最期を遂げたこと。などが語られているが、その戦闘混乱の中で、「いかがりたりけむ、判官弓をかけおとされぬ。…」という、これも有名な「義経の弓流し」の話が登場してくる。

※ 話の粗筋は、次の『源平盛衰記』に譲ることにするが、ここで、「判官」について、解説を加えておこう。

律令制度における官職（四等官制）では、三等官を「判官」と言つたが、平安時代初期から設置されるようになった令外官の一つ、檢非違使（京都の治安維持、訴訟・裁判担当）の三等官を「尉」と称し、左右衛門府の「尉」（判官）も兼帯したので、「檢非違使尉」を「判官」と呼んだ。

源義経は、元暦元年8/6に「左衛門少尉・檢非違使」に補任され、のちには従五位下に叙任されたので、「大夫判官」とも呼ばれた。

以後「判官」と言えば源義経の代名詞のようになった。

II『源平盛衰記』卷第四十二「屋島合戦附玉虫扇を立て与一扇を射る事」の項。

◆判官勝つに乗つて馬の太腹まで打入れて戦ひけり。越中次郎兵衛盛嗣折を得たりと悦びて、大將軍に目を懸けて熊手を下し判官を懸けんと打懸けけり。判官鏝を傾けて、懸けられじ、懸けられじと、太刀を抜き、熊手を打除け、打除けする程に、脇に挟みたる弓を海にぞ落しける。判官は弓を取つて上らんとす。

…如法危く見えければ、源氏の軍兵「あれはいかに、あれはいかに。その弓捨て給へ、捨て給へ」

(義経は)太刀を以て熊手を会釈ひ、左の手に鞭を取つて搔寄せてこそ取つて上る。

軍兵等「縦ひ金銀をのべたる弓なりとも、いかが命に替へさせ給ふべき。あさまし、あさまし」

義経「軍將の弓とて三人張・五人張ならば面目なるべし。されども、平家に攻め付けられて弓を落したりとて、あち取り、こち取り、強きぞ、弱きぞと披露せん事、口惜しかるべし。

又兵衛佐(註、頼朝)の漏れ聞かんもいひ甲斐なければ、相構へて取りたり」

と宣へば、実の大將なりと兵舌を振りひけり。

III『吾妻鏡』卷第四・元暦二年(文治元年、一一八五)を見ると、屋島の戦いの記述はあるが、「義経弓流し」のことは記載がない。

そこで再び『大日本史』の記事を検証してみよう。

IV『大日本史』(卷之一八七 列伝第一一四 將軍家族一 源義経)

▽義経刀を揮ひて之を禦ぎ、誤りて執る所の弓を墜し、將に之を収めんとするに敵益々迫る。從騎連呼して曰く「將軍弓を捨てよ」と。義経右手にて捍敵し、左手にて弓を挑きて之を収めんとす。將佐皆曰く「將軍奈何ぞ一弓の為に不貲の軀を軽んずるや」と。「割註、源平盛衰記」 (原漢文・以下同)

▽義経曰く「吾何為ぞ弓を愛まん。我が弓をして叔父為朝の執れる所の如くならしめば、則ち故に遺して以て敵に示すも亦可ならん。我が弓弱し。之を遺さば侮を受けん。是れ我が危を冒して取る所以なり」と。將佐歎服す。「割註、平家物語」

右の「義経の弓流し」については、「鴨越坂落し」の件と同様に、『大日本史列伝』の「源義経伝」の分註にも、「盛衰記参考」即ち『参考源平盛衰記』にも、「義経手柄之様二書タルハ甚誤ナリ」との議論は記載されていない。

尚、財・水府明德会彰考館に現存する『大日本史』の列伝「源義経伝」の草稿本は、宝永三年(一七〇六)の成立で、撰者は神代園衛門(号鶴洞)、安積覚兵衛覚が再検を施している。その宝永本に、以後校訂・修正が加えられて、現行本の『大日本史』卷之一八七・列伝一一四・將軍家族一「源範頼・源義経・伊勢義盛・佐藤継信・忠信」伝となつたと考えられるのであるが、実は宝永本以前に、「源義経伝」が撰述された形跡がある。

それは元禄九年（一六九六）五月に、彰考館総裁の安積覚兵衛と中村新八の二人が、当時、西山荘に勤番として滞在していた佐々介三郎（介三郎も総裁、複数制）に宛てた書簡^⑩によって、

「先年貴兄編集^{なされ}被^{なされ}成候、源義経伝稿、何方^{いづかた}二有^{これあり}之候哉」

もし覚えていたら教えて頂きたい。関係各方面に尋ねてみたが、全く所在が不明です…

と、介三郎が撰述したという「源義経伝草稿」の所在を照会して来たのであった。右の「源義経伝草稿」修撰の時期は、諸種の史料から推定すると、貞享三年（一六八六）頃から、元禄四年（一六九一）の春頃までの間であつたと思われる。

しかし、その「源義経伝草稿」は、結局のところ所在不明であつたようで、その為に、神代園衛門により新たに撰述された「義経伝」が宝永本ということになるのであろう。

とすれば、曩^{さき}に紹介した回^{ひよどりえ}「鴨越坂落ノ事、文華ノ虚飾也」という「御意覚書」の記事については、立原翠軒の「西山遺聞」では、「佐々宗淳筆記」を引用して、貞享元年（一六八四）九月に光圀が指摘し、指示をしていると記載しているので、貞享三年頃から元禄四年頃に編集されたと推定される、介三郎撰の「源義経伝草稿」には、回^{ひよどりえ}の件が反映され記載されていたことも否定はできない。

佐々介三郎宗淳の撰述による「源義経伝草稿」が現存しないのは、誠に残念なることであると言わざるを得ない。

それでも、『大日本史』現行本に、当該^{ひよどりえ}「鴨越坂落ノ事、文華ノ

虚飾也」という記述が存在しないことも、一つの事実ではある。歴史の神髄を究明することは、誠に難しい。

二、義経に対する、光圀の人物評

以上、「鴨越の坂落し」と「弓流し」を例にあげながら、光圀は、義経の戦略・行動に対する批評を述べているのであるが、しかしながら、『大日本史』や『参考源平盛衰記』の本文にも、割註にも、そのまゝは反映されてはいない。

ところで、光圀は「源義経」という人物を、どのように評価していたのであろうか。『西山随筆』^⑪という光圀の随筆集の中に、次のような一文が収められている。

「源義経、頼朝を輔^{たす}けて亡父の讎^{あだ}を報じ、救命^{ちゆうめい}を奉じて平族を平らぐ、義を重んじて命をかるんず、忠孝の士と云ツへし。

しかるに匹夫^{ひつぷ}の勇にほこりて梶原を辱^{はづか}しめ、傾城^{けいせい}の患^{うれ}を虞^{ほろ}ずして時忠かむすめに私^{わたくし}し、あるひは身を匹夫の矢さきにゆるしておとせる弓をひろひし事など、しばらく武に似たりといへとも、誠ハ将帥^{しょうすい}の任^{にん}をしらざるなるへし」

と、兄頼朝を助けて、亡き父義朝の無念を晴らし、後白河法皇の勅命を奉戴^{ほうたい}して、平家軍を一谷・屋島そして壇ノ浦^{だん}で撃破し、滅亡させたことは、まさに「忠孝の士」であると評価できるが、

○梶原景時の「逆櫓」の主張や、壇ノ浦での「先鋒^{せんぽう}」の懇望^{こんぼう}を斥^{しりぞ}けて、梶原を辱めてその恨みを買ひ、やがて義経自らの身を滅ぼす

一因ともなつたこと。

○正妻として御家人河越重頼の女が居つて、女兒まで儲けながら、白拍子の静を愛人とし、さらには、敵方の平時忠の女を側女にするなど、女性問題を憂慮しなかつたこと。

○屋島の戦いで、敵方の攻撃の危険も顧みず、落とした一弓を拾つたことなど。

いずれも、武將らしいと言えば、その様にも受けとめられるが、しかし、大軍を率いる將帥としては、その真の任務は如何なるものであるかを知らない武士であつたと言わざるを得ない、というのが水戸光圀の「源義経」に対する評価であつた。実に厳しい人物論である。

では、光圀は、義経を冷酷に、厳しく評価するだけであつたのか、というと、その心情は決してそうではなかつたのである。

三、義経に寄せる、光圀の心情

光圀の側近として仕えた儒医の井上玄桐が記した『玄桐筆記』という書物の一節を見ると、

「御謡ハ…鍾馗と撰待の曲舞を御すきにて、毎度謡はせらる。撰待を遊ばされ畢りては、是は我等がうたひなりとおおせらる」と記されている。

※ 謡曲「撰待」は、義経に臣従した佐藤繼信と忠信兄弟の母が、陸奥国の信夫（福島県）で、山伏撰待と称して義経一行を待ち受けていた。そこへ山伏姿の義経ら主従一行が身分を秘して立ち寄つた。

しかしその母から、彼らの名を当てられてしまい、「実は」と、義経一行の奥州への逃避行のことを告げた。

そこで、母の請いによって弁慶は、繼信が屋島の戦いに義経の身代わりとして戦死したことや、弟忠信が兄の敵を討つたことを語つて聞かせた。母が、今は亡き我が子を偲びながら、一行に酒を勧めると、繼信の遺子鶴若が、わが父の為に給仕する心持ちで、終夜の酌をした。

やがて一行が発つ時、鶴若は供をしたいとせがんだが、皆に慰められて、老祖母と涙ながらに一行を見送つた。

（シテ||繼信の母、ツレ||義経、ワキ||弁慶、子方||鶴若、他の同行者はツレという配役）

光圀は、「是は我等がうたひなり」||「これは私の謡である」と言われたという。人として、殊に武將として、光圀自身も、いつ如何なる時に悲劇逆境に陥るか計り知れないものがある。人の真価は、そうした時に発揮される。

光圀は、武將としての「在り方・生き方」については、義経に対し、厳しい批評をしているが、心情的には、義経の短い生涯に見る「雄々しく哀しく切なく美しい武士の心」に、自らの若き日に思いを馳せ、謡曲「撰待」を謡うことによって、九郎判官義経に自身を重ね合わせ、熱い涙を流したのであろう。

四、義経の最期と入夷伝説

【義経、奥州平泉下向・藤原秀衡のもとへ】

文治元年三月の壇ノ浦の合戦のあと、種々の要因が重なって頼朝の不興を買い、疎まれて腰越に止められ、京都へもどった後も、身の置き所を失った義経一行は、一旦は吉野山に逃れたが、遂にその行方をくまらずに至った。以下、年表的に示すと、

◇文治元年（一一八五）11/6 義経等一行は消息を絶った。

（のち朝廷では、義経の名を義行、さらに義顕と改名させた）

◇同 三年（一一八七）春頃には、平泉の藤原秀衡のもとに匿われ

高館（衣川館）に居る。（義経29歳）

10/29 藤原秀衡が死去。

◇同 四年（一一八八）2/21 義経追討の院宣が、藤原泰衡に発せ

られる。（10/12に再度の院宣）

【義経の最期】

◇文治五年（一一八九）閏4/30 藤原泰衡ら、衣川館に義経らを

襲う。義経自害（31歳）。

義経の最期については、諸書を見ると、以下の様に記されている。

I 『源平盛衰記』卷四十六「義経行家都を出づ並義経始終の有様の事」

「…妻女（註、河越太郎重頼の女）申しけるは、「一人の子なければ思ひ置く事なし。残り居て憂き目を見ん事も心憂し。我を先立てて、死出の山を共に越え給へ」と言ひければ、義経「南無阿弥陀仏」と唱へて、女房を左の脇に挟むかと思はば、首を掻き落して右に持ち

たる刀にて我が腹搔わりて打臥しにけり。」

と、自害の際には、義経夫婦のみで、子供は居なかったように書かれている。一方、『吾妻鏡』の記事は少し違う書き方をしている。

II 『吾妻鏡』卷九「文治五年閏四月」

「三十日己未今日陸奥国に於て、泰衡源予州（註、伊予守義経）を襲ふ。是れ且は勅諭に任せ、且は二品（註、正二位頼朝）の仰に依つてなり。予州、民部少輔基成朝臣の衣河館に在り。泰衡兵数百騎を従へ、其所に馳せ至り、合戦す。予州の家人相防ぐと雖も悉く以て敗績す。

予州持仏堂に入りて、先づ妻「割註、廿二歳」子「割註、女子四歳」を害し、次に自殺すと。云々。

前伊予守従五位下源朝臣義経「割註、義行又は義顕と改む。年三十一」。

と、四歳の女の子が居て、義経の手によって殺害されたと記されている。次に『義経記』卷第八「判官御自害のこと」では、義経の自害、乳人兼房による北の方（妻）と若君（五歳）・姫（生後七日）の凄惨な刺殺の場面などが詳しく語られているが、本稿では省略する。

III 『大日本史』の「將軍家族一・源義経の伝」を見ると、

「閏四月晦、泰衡兵を遣はして、衣川を襲ふ「割註、東鑑」。鷲尾経春等力戦して死す、是に於て、義経妻子を刺し殺して自殺す。時に年三十一。泰衡首を鎌倉に伝ふ。見るもの皆涙を墮せり。」

と、基本的には『東鑑』（『吾妻鏡』）によって、「妻子を刺殺して」自

殺したと記述している。

【義経の首と死亡説への疑問】

I『吾妻鏡』巻九「文治五年六月」

「十三日辛丑泰衡の使者、新田冠者高平、予州の首を腰越の浦に持参し、事の由を言上す。仍つて実檢を加へんが為、和田太郎義盛・梶原平三景時等を彼所に遣はす。…件の首黒漆の櫃に納め清美の酒に浸し、高平の僕従二人之を加担す。…」

と、事の次第を修飾なく記している。問題は、義経の自害が閏4/30で、首の到着は6/13。つまり四十三日を経過していることである。

当然、『大日本史』でもこの点を問題にしている。

II『大日本史』の「源義経伝」の末尾の割註

「東鑑。源平盛衰記。八坂本平家物語を参取す。…世に伝ふ、義経衣川館に死せずして、遁れて蝦夷に至ると。今東鑑を考ふるに閏四月己未（閏4/30）、藤原泰衡義経を襲ひて之を殺す。

五月辛巳（5/22）、報至り、將に首を鎌倉に致さんとせしが、時に頼朝、鶴岡の浮函を慶したり。故に使を遣はして之を止む。

六月辛丑、泰衡の使者首を齎して腰越に至り、漆函もて之を盛り浸すに美酒を以てす。頼朝和田義盛・梶原景時をして之を検せしむと。己未より辛丑に至るまで、相距ること四十三日。天時に暑熱なり。函して酒に浸したりと雖も、焉ぞ壞爛腐敗せざることを得ん。孰か能く其の真偽を弁せんや。

然らば則ち義経は偽り死して遁れ去りしか。今に至るまで夷人義

経を崇奉し、祀りて之を神と為す。蓋し或は其の故あらん。」

※ 右の『大日本史』の割註では、「義経入夷説」について肯定的な見方に立っているが、かなり慎重な記述をしている。

一方、彰考館の総裁をも勤めた史臣の安積覚兵衛（号澹泊）は、『論贊』の中で次のように記している。

III安積澹泊撰『大日本史論贊（贊藪）』（巻の一八八・將軍家族伝）

「世に伝ふ…其の真偽を弁ぜんや。」までは、『大日本史』の割註と同文である。

「義経の機警は人に絶す。危きに臨み、險を踏みて、死せざるもの数々なり。其れ必ず首を庸劣の泰衡に授けざるなり。

頼朝の奸雄なる、天下に揚言するに、其の首を獲たるを以てすれば則ち人心を鎮圧するに足り。必ずしも其の実を究詰せざるなり。然らずんば、何ぞ其れ稽緩此に至らんや。

蓋し泰衡をして義経を襲殺せしめ、然して後に、其の義経に党するの罪を声して之を取る。此れ頼朝の成算にして、固より已に胸中に瞭然たることも、亦推して知る可なり。

今に至るまで夷人義経を崇奉し、祀りて之を神と為す。之を情理に揆るに、其れ或は然らん。」

と、義経ほどの戦略家が、藤原泰衡ごときに簡単に敗北し、自らの首を与えてしまうようなことは考えられない。又、頼朝は奸智に長けているので、必ずしも義経の実の首を取ることはしなくても、泰衡を動かして義経を攻撃させ、討伐したと天下に広言すれば、絶大な効果が

得られるはずであると言ひ、

「今に至るまで夷人義経を崇奉し、祀りて之を神と為す」と、『大日本史』割註と同文で記し、そして最後に安積澹泊は、

「之を情理に揆るに、其れ或は然らん」

と、義経が蝦夷地に渡つたということをも多くの人々が信じ、蝦夷人が義経を「神」として祀っていることは、人情から言つても、道理から考えても、十分に納得できることであると、「義経入蝦説」について『大日本史』割註よりも、更に主観的・肯定的に論述している。

以上のような『大日本史』割註や『大日本史論贊』の記事を見てくると、各種の歴史物語や記録をもとに検討し叙述したというよりは、もつと積極的な根拠のようなものを柱として記しているように思えるのである。

そこで思い当たるのが、光圀による「快風丸」という大船の蝦夷地派遣の事跡である。

五、光圀による「快風丸」蝦夷地派遣

光圀は、如何なる目的であるかということは明らかにしてはいないが、「快風丸」という大船を建造し、蝦夷地渡航を三回にわたつて計画している。

その「快風丸」派遣についての研究論文等は、かなりの数に上つているが、筆者が注目し、参考にさせて頂いた先賢の論文が三種ある。

○名越時正氏「まぼろしの探險船―快風丸についての考察―」

(茨城県立水戸一高史学会『史窓』第22号・昭和45年)

○佐藤次男氏「徳川光圀と快風丸の蝦夷地探險について」

(水戸史学会『水戸史学』第8号・昭和53年)

○瀬谷義彦氏「義経余情 義経伝説と『大日本史』」

(茨城新聞社『茨城地方史の断面』平成16年)

右の先賢の研究と、現存する快風丸に関する各種史料(佐藤次男氏提供の複製写本)、例えば、

『快風船涉海紀事』『快風丸蝦夷聞書』『快風丸之事』

『快風丸考』『快風丸記事』

等々を参考にして、義経伝説・快風丸蝦夷地派遣・大日本史編修などとの関わりを、少しく考えてみたいと思う。

I 大船「快風丸」の建造と蝦夷地派遣

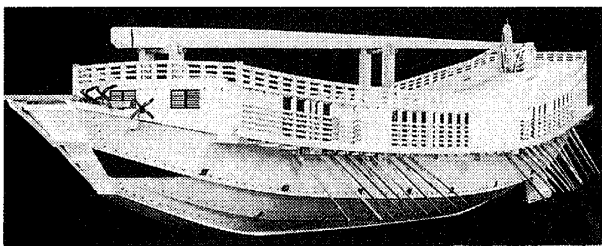
①「規模」(『快風船涉海紀事』)

- ・五〇〇ト超?の大船
- ・総長が二十七間(約48 m)
- ・横幅が九間(約16 m)
- ・杉材の帆柱十八間(約32 m)
- ・木綿の帆布五百反
(延べ約450 m)

・櫓四十挺く六十挺立

◆ 佐藤次男氏の研究によると、

長崎から購入した備品として、



「快風丸」想像復元模型 (水戸市立博物館蔵)

「いすたらひ」(航海用太陽測高器)

「くわたらんで」(クワドラント、北極星・太陽の測度器)

「こんはず」(コンパス、測度器)

「大じしゃく針」(羅針盤) その他多数があり。

等々があり、

「造船、装備、航行のために当時の最高水準をもつてしようとしたことが窺われる。すなわち、西洋伝来の造船・航法の技術、南方貿易による造船・航法の経験と知識を充分にとり入れたといつてよいであろう」(同氏前掲論文)

と、規模・装備等のすぐれていたことを評価されているが、建造地は不明とされながらも、「那珂湊なかにみなとであろうか」と推察されている。

②「快風丸の蝦夷地渡航の企て」

さて、その快風丸は、建造後、三回の渡航が計画されている

第一回「貞享三年」船頭は鈴木平十郎。那珂湊から出航、途中でら引き返して帰港。

第二回「貞享四年」船頭は崎山市内。松前まで渡航、以北への調

査は、松前藩により不可。

◎第三回「元禄元年」船頭は崎山市内。総人数67人。

2/3 那珂湊出航。6/6 松前に到着。6/23・24 頃松前出船。

6/26・27 頃 石狩に着船。御目付足軽深野荻衛門おぎゑもんら、石狩川を

三日程奥地に入り調査。「蝦夷地滞在・40余日」

8/6・7 頃 石狩出航(途中大時化に遭遇)。

8/15 頃 松前に着船、逗留。12/27 那珂湊へ帰港。

II 快風丸の蝦夷地調査

光圀は、どういう目的を以て快風丸を建造し、蝦夷地派遣を実施したのであるうか。『快風丸蝦夷聞書』『快風船涉海紀事』等を元に、名越時正氏や佐藤次男氏が推定された目的は、

① 「蝦夷地と蝦夷人の生活」

② 「蝦夷の反乱(シャクシャインの乱など)」

③ 「義経入夷伝説」

④ 「松前城下の事」

等であろうということであった。

そこで、本稿との関わりから、③「義経入夷伝説」に絞って『快風丸蝦夷聞書』から、採取・記録されている義経関係の記事を書き出してみると、

◇「判官塚はつかんづかトテ絵図えずニ在通り也。場所二高七八尺程、指渡さしわた九尺四方

斗ぼとノ塚アリ、上二板いたヤト云木ヲ植ル「割註、荻衛門見タル時ハ三

尺マワリ斗、定テ後二植タルカ所ニテ、魚取サルカ何ソ大事ニハ

此判官塚へ祈ルなをすかんあり必感応有ト云」

◇「蝦夷人左ノ三ツ巴とろへヲ判官殿ノ紋もんトテ、マキリ、ノ鞆たもとナド彫付ル所

ノ者此紋ヲ大切ニ思フヨシ、マキリノ鞆一段手キハヨキ細工ナリ」

◇「酒ヲ取アケテ神ニ奉ル様子ニテ言テ曰ヲキクルミ」割註、判官

殿ノ事」ヘンケイ「割註、スミテ」ニシバタダチ「割註、判官殿

家臣達」ト云テ飲申候」（片仮名の部分は、記録によって種々異同があり、明確ではない。）

◇「長五六尺七八九尺ヨリ大ナルハナシ。櫓二挺仕カケ一度二二挺ノ櫓動キ候ヨシ、車ヲ付カラクル判官殿ノ車船ト所ノ者申候、然レハ判官殿昔拵へ初メラレタル歟」

等々について、快風丸の乗組員（誰が『蝦夷聞書』を記録したか不明であるが）が、義経にまつわる各種の伝説を聞き書きして、大変興味深く、また蝦夷地と義経の関わりを単純に否定できないものが存在するように思えてくる。

『大日本史』の編修に於ても、以上の快風丸の蝦夷地調査の結果は『源義経伝』の末尾の割註の記述、そして安積澹泊の『（義経の）論贊』の文章等に、反映されたのではないかと思われるのである。

尚、瀬谷義彦氏の「義経余情―義経伝説と『大日本史』」の論文は、同氏が自ら義経伝説の跡をたどって、奥州から蝦夷地北海道へと旅をされ、実地に調査された体験を元に叙述されたもので、示唆に富んだ、興味深い一文であることを付記しておこう。

六、義経の「北行・入夷伝説」「成吉思汗説」など。

【義経の入夷伝説】

源義経が衣川館で死亡せず、生き長らえて蝦夷地までも渡ったとする「入夷伝説」は、アイヌの民族神「オキクルミ」の伝説と、義経の「判官鼻眞」とが結びついて、広く普及し、崇められていったのではな

いかと思われる。

【義経Ⅱ成吉思汗説】

1 ドイツ人シーボルトの著作『日本』（一八五三）に、彼の友人で、オランダ通詞の吉雄忠次郎が「義経は成吉思汗になったと信じている」と語っていたと記載している。

2 末松謙澄「征服者成吉思汗は日本の英雄義経」（明治12年・英文で発表）

3 内田弥八『義経再興記』（明治18年刊）

4 小谷部金一郎『成吉思汗は源義経也』（大正13年刊）

等々が、先賢の研究によって紹介されている「義経Ⅱ成吉思汗説」の主なるものである。

おわりに

「九郎判官源義経」とは、まさに謎の人物である。その生涯についても諸説紛々。實在さえ疑う論説者もいる。

しかし、魅力のある人物でもある。そこにまた「判官鼻眞」の源泉があるとも言えるのではなからうか。

本稿では、『大日本史』という歴史編纂の大事業を推し進め継続させた水戸黄門こと、水戸二代藩主徳川光圀即ち水戸光圀が、源義経という人物をどのように見ていたか。源平合戦の中で、義経がとった戦略や行動をどのように分析し、武將義経に対して如何なる評価を与えているか等について検討してみたい、というのがその目的であった。

紙数の関係で、義経の生涯や事跡について、網羅的に触れることは避け、ごく二・三の問題に焦点を絞って検討してみた。

その結果として、断片的ではあるが、次のようなことが言えるのではないかと思うのである。

「光圈は、義経に対して武将としてのあるべき姿を冷徹に追い求め、「鶴越の坂落し」や「弓流し」の作戦・行動に関して、厳しい評価を与えるとともに、『西山随筆』では、「義を重んじて命をかるんず、忠孝の士と云ツへし。…誠ハ将帥の任をしらざるなるへし」と、一軍の武将としてではなく、兄頼朝の命をうけ、その代理者として大軍を率いる将帥としては、その真の任務を知らない武士であったと言わざるを得ない、と批判したのであった。

しかし、一方で光圈は、心情的には義経を敬愛し、彼の短い生涯に熱い涙を流す武士でもあった。謡曲「摂待」を「是は我等がうたひなり」と愛好したこと。大船「快風丸」を建造し、他の目的もあつたと思われるが、蝦夷地へ派遣して「義経入夷伝説」を調査させたことなどは、水戸光圈の、源義経に対する熱き思いの一端を示すものであつたと思えるのである。

平成十七年度のNHK大河ドラマ「義経」の放映を一年間楽しみながら、水戸光圈の義経に対する「ことば」を思い返しつゝ、あれこれと考えてみた。それをまとめたのが本稿である。

最後になったが、本稿を執筆するにあたって、特に元茨城県立歴史館史料部長の佐藤次男氏から懇切なるご教示を頂くとともに、貴重な

史料を借覽させて頂いたことに、心から感謝申し上げ、御礼を申し上げます。次第である。

【註】

- ① 『水戸義公伝記逸話集』（常磐神社刊）
- ② 同前書所収
- ③ 『日本古典文学全集』29（小学館刊）
- ④ 『校注日本文学大系』第16卷（国民図書⑭刊）
- ⑤ 同前書所収
- ⑥ 『譯文吾妻鏡標註』第一冊（名著刊行会刊）
- ⑦ 川崎紫山編『訳註大日本史』
- ⑧ 『日本古典文学全集』29（小学館刊）
- ⑨ 『新定源平盛衰記』第五卷（新人物往来社刊）
- ⑩ 『譯文吾妻鏡標註』第一冊（名著刊行会刊）
- ⑪ 川崎紫山編『訳註大日本史』
- ⑫ 京都大学所蔵『大日本史編纂記録』49
- ⑬ 「西山随筆」坤一士（徳川圀順編『水戸義公全集』中）
- ⑭ 『水戸義公伝記逸話集』（常磐神社刊）
- ⑮ 佐成謙太郎著『謡曲大観』第三卷（明治書院刊）
- ⑯ 宮田正彦著『水戸光圈の遺猷』一三 水戸黄門外伝一
- ⑰ 『新定源平盛衰記』第六卷（新人物往来社刊）

- ⑱ 『譯文吾妻鏡標註』第二冊（名著刊行会刊）
⑲ 川崎紫山編『訳註大日本史』所収本
⑳ 茨城県立歴史館架蔵本、水府明德会彰考館架蔵本

〔本学教授、〔道德と福祉の心〕〔日本の文化〕担当〕